

蟠龍（はんりゆう）「力を蓄える」



「絵本初心柱立」
(正徳五年・一七一五年)

ところで、辞典では「蟠龍」と書かれておりますが、常用漢字表で龍の字は、龍の旧字とされています。そして絵手本では、「輪龍」や「龍之丸」などとも表現されております。

やはり龍の絵においては、「龍」の字が、しつくりといったします。

法堂の天井に描かれる龍は、主に雲の中にいる「雲龍」が多いのですが、京都の臨済宗相国寺の法堂の天井には、手を打つと龍の鳴き声に例えられる、特有の反響音がある事から、「鳴き龍」として知られる、狩野

描かれております。

さて、「蟠龍」とは、「地上に蟠つてまだ天に昇らない龍」の事で、「蟠る」の意味は、「とぐろを巻いている」との事です。いつの日か、天に昇るために、日々、力を蓄え、準備をしている龍という訳でございます。そんな蟠龍の事を思い、このお皿を眺めていると、若き修行僧の方々が、法堂の蟠龍を仰ぎながら、高僧の説法のもと、日々、研鑽を積まれている姿が、目に浮んで参ります。

う意味が込められています。



伊万里
江戸後期
志田焼
尺皿

お寺や神社の障壁画には、色々な龍の絵が描かれております。そして、その龍の絵には、形や様子によって、それぞれの名前がございます。また江戸時代のお皿にも、同じように様々な龍が描かれており、人々は食事と共に、その龍の名前や意味を語り合い、楽しまれたようでございます。

お寺や神社の障壁画には、色々な龍の絵が描かれております。そして、その龍の絵には、形や様子によって、それぞれの名前がございます。また江戸時代のお皿にも、同じように様々な龍が描かれており、人々は食事と共に、その龍の名前や意味を語り合い、楽しまれたようでございます。

踞地金毛の獅子

「踞地」とは、獸などが前肢を折つて、「地面」に腹をつけて、「踞る」ことでござります。

獅子は、今にも獲物に飛びかかるうとする時、目を爛々と輝かしながら、周囲に注意を払い、満身に力をみなぎらせて、「大地に踞る」。その姿を、古人は「踞地金毛の獅子」と言い表わされました。これも、「橘守国」画伯の絵手本「絵本通宝志」(享保十四年・一七二九年刊)の内題(目次)に、「踞地」と書かれていたからこそ、辿りつく事が出来ました。



伊万里
江戸後期
志田焼
一尺四寸皿

いました。この一喝は、「いかなる豪傑でも、肝をつぶす程すさまじい」といわれております。

さて、「北斎漫画」の十四編にも、さて、「北斎漫画」と題して、前肢を折つて、地面に腹をつけて踞る獅子の様子が、見事に描かれておりました。



橘守国画
「絵本通宝志」
(享保十四年・一七二九年)



葛飾北斎画
「北斎漫画 十四編」
(刊年未詳)

桃持ち猿に月「猿は庚申の使わしめ」

動物

この絵皿は、何やら三日月と桃を手にした猿が描かれております。それでは、その謎をゆっくりと、解いて参ります。

中国の道教によりますと、「人の体の中に『二戸』という虫がいて、庚申（かのえさる）の日の夜になると、人が寝ている間に、体から抜け出して天に登り、天帝にその人の罪を告げ、それにより寿命が縮まってしまう」とされています。



伊万里
江戸後期
志田焼
だやき
一尺一寸皿

この庚申信仰は、平安時代に伝わり、江戸

時代になりますと盛んになり、人々は「庚申講」という仲間を作り、「十干十二支」に基づいて、「六十日」ごとにやってくる庚申の日は、皆で揃って夜明かしをする、「庚申待」を行なつたのでございます。

そして、それぞれの講中（信者の集まり）は、記念として「庚申塔」を建てたりしたのですが、そこには、「申」の日に因んで「三猿」や「桃持ち猿」が彫られました。その「桃の実」は、古来、「邪氣祓い」の力を持つとされて参りました。

このお皿には、桃持ち猿の頭の上に三日月が出ており、夜を表わしております。という訳で、このお皿は、「御申待」とも呼ばれた、庚申待の夜の集まりでは、鯛などを盛り、珍重されたことでございましょう。その様子の絵が「群玉百人一首千歳宝」（天保二年・一八三一年刊）に載つておりました。



「絵本たからくら」
（享保三年・一七一八年）

また、江戸中期に出された絵手本の、「絵本たからくら」（享保三年・一七一八年刊）に、「猿は庚申の使わしめ」との一文があり、「使わしめ」とは「神仏の使」の意でございます。

大黒ねずみ「大黒様の使わしめ」

動物

「白鼠」を辞書で調べてみたところ、「大黒天の使で、そのすむ家は繁昌すると伝えられ、大黒ねずみともいう」と記されておりました。

大黒様は、恵比寿様とともに民間信仰の福神として、古くより台所に祀られて参りました。そしてまた、次のような意味を込めて、佛教や神道でも崇められています。



伊万里
志田焼
江戸後期 尺皿

「仏教」では、大黒天は「北方の神」とされており、その「北の方角」は、十二支の「子」に当たるため、鼠は「大黒天の神使」とされております。また、「神道」での「大国主命」の「大国」が、「だいこく」とも読めるため、習合し、その大国主命が「鼠に救われた」との神話から、こちらも鼠が神使と

されております。そこで、特に白鼠は、「大黒様の使わしめ」として縁起が良いとされ、「大黒ねずみ」と呼び、賞でられたようございます。

さて、お皿の絵には、大根と白鼠が見えます。その大根は、「二股大根」として描かれる事

福が来るとして、大黒天の供物にした」とあります。(「花・七福神の巻」186ページを参照下さい)という訳で、このような絵は、大黒様の姿は見えずとも、二股大根と白鼠を描き、暗に大黒様を匂わせる「判じ物」でもあります。

ところで、お皿の絵の白鼠は、大根を食べているように見えます。そこで、「大根食う」を、「だいこく」の音に掛け、洒落としても楽しめたようです。絵皿の大根と大黒ねずみを見てみると、何やら福徳の神の大黒様の笑顔が目に浮かび、ほのぼのとして参ります。暗示は、



葛飾北斎画「北斎漫画 初編」
(文化十一年・一八一四年)
江戸時代に愛でられた白鼠と斑鼠



橘守国画「絵本写宝袋」
(享保五年・一七二〇年)

伊万里
志田焼
江戸後期 五寸皿



時として、心を和ませてくれます。大黒様の笑顔が目に浮かび、ほのぼのとして参ります。暗示は、



橘守国画「絵本写宝袋」
(享保五年・一七二〇年)

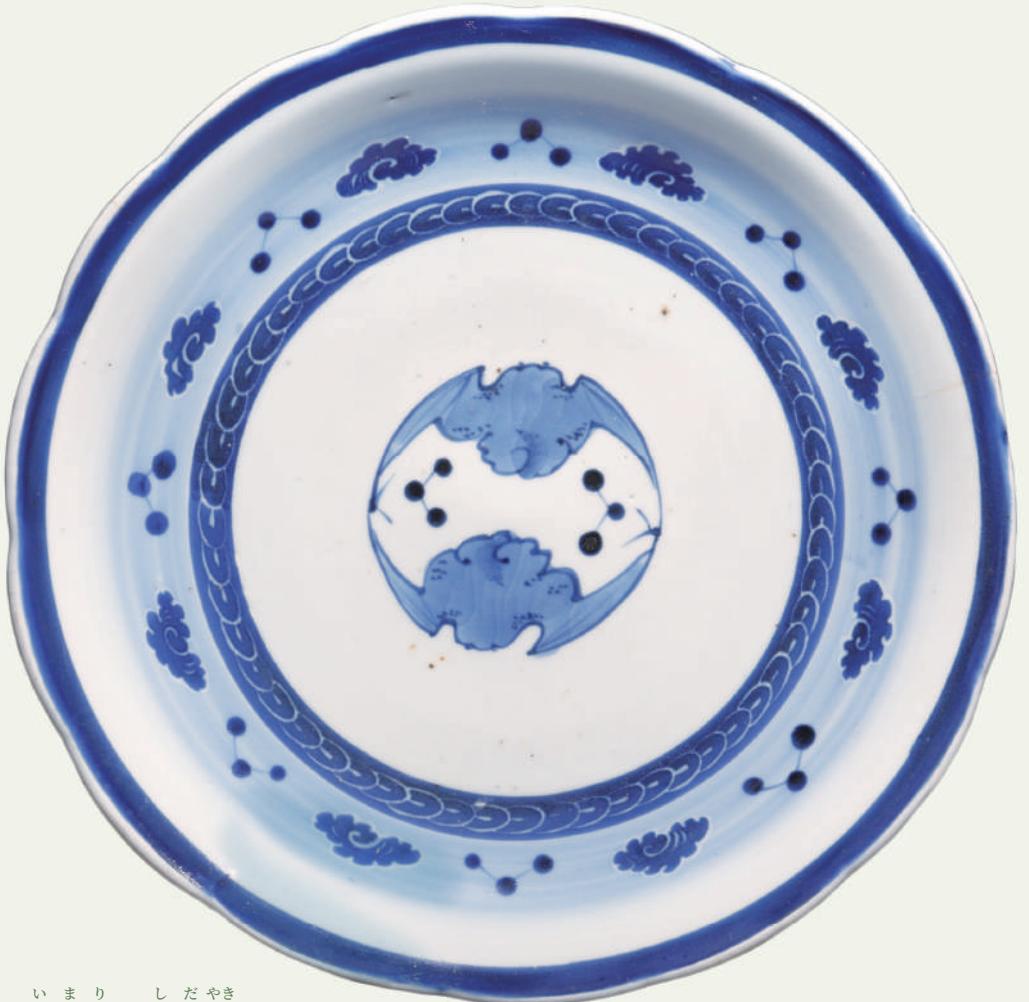
伊万里
志田焼
江戸後期 五寸皿



時として、心を和ませてくれます。大黒様の笑顔が目に浮かび、ほのぼのとして参ります。暗示は、

二匹の蝙蝠「双福・福は天よりの定め」

動物



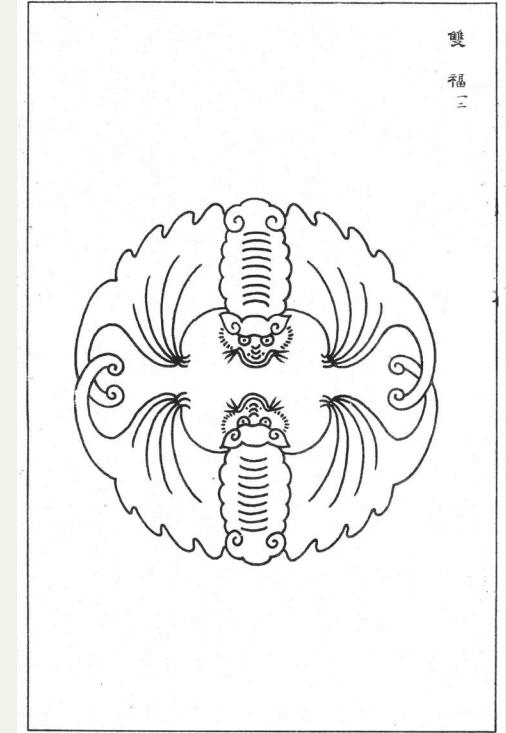
伊万里焼
江戸後期 尺皿

江戸時代の絵皿を、色々と調べていますと、その絵の題材や由来は、中国から学んだものが、基本になっている事が窺えます。これは、「漢字」にしても、法隆寺などの「寺院建築」、「都の造り方」まで、漢(中国)から学んだ訳ですから、当然の事と思われます。日本は古くより、中国の文化圏だったという訳でございます。

このお皿には、見込みに二匹の蝙蝠と、何やら星らしきもの、それに雲とおぼしきものが描かれております。しかし、その図柄が何を意味するのか、当初は見当もつきませんでした。

さて、中国の書物によりますと、「蝙蝠」の音読みの「蝙蝠」は、その音が「遍く福が

来る」という意の、「遍福」に通じるとして賞められました。次に、線でつながった三つの星は、「星辰」といい、星や星座の象徴であり、そして雲は、めでたいしるしの、「瑞雲」でございます。



伊万里焼
江戸後期 七寸皿

〔吉祥図案解題〕
(昭和十五年・一九四〇年)



このお皿の「星と雲」は、「天」を意味し、そして、天から舞い降りてきた二匹の蝙蝠で、福が双んだ「双福」として、めでたさを表わしているのでございます。

そして、「福は天よりの定め、善の報い」の意は、「人の欲は、天の道理の中であれ」という、「天理人欲」の教えと通じております。

橙に蜘蛛の巣と蝙蝠

「先祖代々」

動物

このお皿には、天から福をもたらす蝙蝠と、待ち人來たる喜びを知らせんとして降りてくる蜘蛛の、その巣が描かれております、そして見込みには、橙色に色づく果実を放つてお

くと再び青色になり、翌冬、橙色になることから若返りと、何代もの果実が樹につくことから、「代々」に通じるとして賞でられる、『橙』が描かれております。

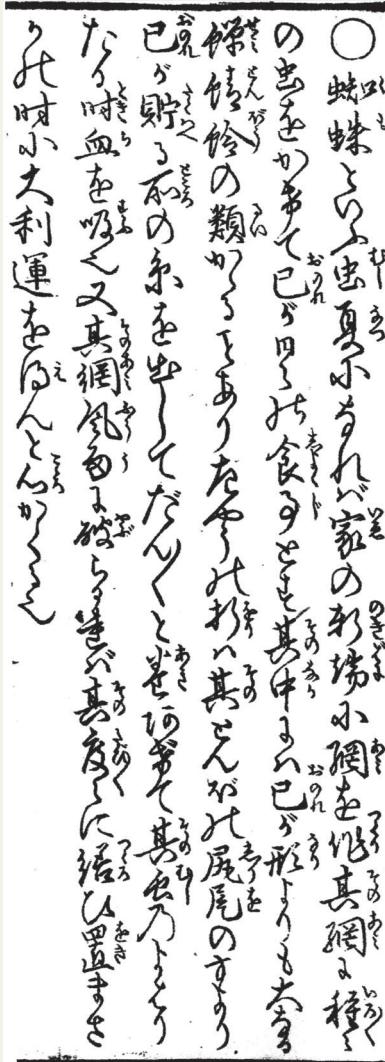
伊万里
江戸後期
志田焼
尺皿



さて、文化十三年（一八一六年）に出された『利運談』に、蜘蛛の事が次のように述べられておりました。

「蜘蛛といふ虫、夏になれば、家の軒端に網を作り、其網に種々の虫をかけて、己が日々の食事とす。其中には己が形よりも大なる、蟬、蜻蛉の類かかることがあり。さやうの折は、其とんぼの尻尾の方より、己が貯る所の糸を出して、だんだんと巻あげて、其虫のよはりたる時、血を吸也。又其網、風雨に破られるれば、其度々に繕ひ置、まさかの時に、大利運を得んど、心がくる也」。

このように古人は、自然の生き物の姿や様子から、その心を学び、人生のお手本と、されてきたのでございましょう。



長谷川雪旦画「利運談」（文化十三年・一八一六年）
右・絵部分 左・解説部分

○蜘蛛といふ虫、夏になれば、家の軒端に網を作り、其網に種々の虫をかけて、己が日々の食事とす。其中には己が形よりも大なる、蟬、蜻蛉の類かかることがあり。さやうの折は、其とんぼの尻尾の方より、己が貯る所の糸を出して、だんだんと巻あげて、其虫のよはりたる時、血を吸也。又其網、風雨に破られるれば、其度々に繕ひ置、まさかの時に、大利運を得んど、心がくる也。

天がおつくりになった、生きとし生けるものの生き方は、それぞれ様々ですが、福や喜びが「代々永遠」に続くことを願われた、往時の方々の子孫への思いが、この一枚の絵皿から伝わって参ります。

浦島太郎

蓬萊山から龍宮城

日本人物



九谷焼
江戸後期～明治前期 八寸皿

尋常小学唱歌の「浦島太郎」(明治四十四年・一九一一年発表)は、「昔々浦島は、助けた亀に連れられて、龍宮城に来てみれば、絵にも描けない美しさ」と、今でも歌われています。

ところが、江戸時代中期に出された、「絵本故事談」(正徳四年・一七一四年刊)には、亀はいじめられておらず、奈良時代の「丹後国風土記」に基づいて、次のように書かれておりました。

浦嶋子

雄略天皇二十二年秋七月、丹州余社の郡管の人、水江の浦嶋が子といふ者舟に乗て釣を垂る。遂に大なる亀を得たり。化して女となる。浦嶋が子、感じて夫婦となる。



葛飾北斎画「北斎漫画 初編」
(文化十一年・一八一四年)

相伴て海に入、蓬萊山に至り、三百年を歴て、淳和帝天長二年に帰る。別るに及で、婦玉手箱を与へ、いましめていはく、『開ことなけれ』と。浦嶋が子帰りて、未審くや有けん、箱を開ければ、中より煙たちのぼり、其時浦嶋が子、若き形を変じて、忽白髪の老翁となれり。世俗に、あけてくやしき玉手箱といふ、是なり。

さらに、江戸後期になりますと、この話を様々なに脚色した読本が次々と出され、「浦島太郎二度目の龍宮」(安永九年・一七八〇年刊)では、鯛や平目が登場し、太郎は舟ではなく陸上に乗つております。

そして、明治二十九年(一八九六年)嚴谷小波が、今も語られている「浦島太郎」(日本昔話十八編)を発表し、唱歌にもなったのでございます。そんな訳で、お皿の絵なども、陸上の龍宮城へ向かつております。

源氏物語「明石」

日本人物

ある日、何気なく江戸中期の「橋守国」画伯が出された「絵本写宝袋」（享保五年・一七二〇年刊）を見ておりましたら、このお皿の絵に似たような図柄がございました。



伊万里型紙摺絵
志田焼
明治前期 九寸皿

そこでは思いついたのが、このお皿の絵は手描きではなく、「型紙摺絵」のため、左右が逆の絵になつたのではないか、との疑問でした。早速、絵手本に描かれている絵をコピーして、そのように思えてなりませんでした。

そこで思いついたのが、このお皿の絵は手描きではなく、「型紙摺絵」のため、左右が逆の絵になつたのではないか、との疑問でした。早速、絵手本に描かれている絵をコピーして、そのように思えてなりませんでした。

それは、「源氏物語」第十三帖「明石」の場面で、光源氏と従者が描かれたものでした。お皿の絵とは、どこか似てはいるのですが、左右の向きも違い、従者の数も違つております。しかし、何かしら「馬の顔の角度」や、「手綱を引く口取の後姿」などが、模写されていました。



橋守国画「絵本写宝袋」
(享保五年・一七二〇年)

して、裏から透かして見たところ、「馬上の光源氏」、「馬の顔や足」、そして「口取の男の姿」は、絵手本そのものでございました。

それにしましても、明治の「絵型彫師」が、百五十年以上も前の絵手本を大切にし、日々学んでいた事に、「時の流れの穏やかさ」を感じずにはいられませんでした。

さて、紫式部の創作された「源氏物語」は、史実ではありませんが、その「明石」のあらすじは、およそ次のようなものでございます。

「明石入道」というお方は、近衛中将を辞し、出家をされて明石に住んでおられました。ところが、光源氏が都から身を退かれ、須磨でわびしく過ごされている事を知り、源氏に娘の『明石の上』を、嫁がそうと思われました。そして、源氏をお迎えに、須磨へあがられました。そこで光源氏は、須磨から明石に移られ、「明石の上」とお逢いになり、ほどなくお二人は、恋をされるのでござります」。

米づくり 「稻作の始まる日・種もみ」

日本人物



ひらどやき
平戸焼
江戸後期～明治前期 六寸皿

このお皿の絵の童は、弁当を片手に、亀を引き連れて、父親の後について歩んでおります。さて、この親子はどこへ行くのでしょうか。私の幼き頃までは、まだ同じような風景が見られましたが、今はもう見る事もございません。この様子は、三月頃の春の季節です。父親は、稻の苗を作るために、まずは保存してあつた種もみの俵を荷い、池へと向かいます。

橋守国画「絵本通宝志」
(享保十四年・一七二九年)
種もみを池水へ漬ける

そんな訳で、絵皿の絵の意味は、「稻作の始まる日」の光景でございました。そして、そこに描かれてる亀は、当時の童の愛玩動物物という訳です。

和国耕作図
抑此世に生来て、此米を食する人は、

農人にあらず共、此米をつくる様を、知

りらずんばあるべからず。しかばあれどもを見ながら思うのは、童等が、親達の働く姿を見て育ち、知らず知らずのうちに、仕事の術を身につけ、一生食べてゆける、「安心感のある人生」の素晴らしさです。

江戸中期に絵手本を多数出され、後に「画者の釈尊」とも呼ばれた橋守国画伯は、「絵本通宝志」(享保十四年・一七二九年刊)の中で、「和国耕作図」と題して、稻作の嘗みを丹念に描かれ、その説明と共に、なぜ、これらの絵を描かれたの

かについても、記しておられます。

和国耕作図
抑此世に生来て、此米を食する人は、

農人にあらず共、此米をつくる様を、知

りらずんばあるべからず。しかばあれども田舎に住居せずしては、ことごとく、その生長収蔵の次第を見る事がたし。かるがゆへに、これを絵に写して農人の力をもらひ、辛労して生長し、みのる事を知て、貴人は民をあはれみたまひ、庶人は米穀を大切におもふべき、たよりともなるべし。

又、畿内にて早稻をつくる法は、まづたねを、せつぶんより二十日めに水にかし、二十日すぎてとり上、十日目にほし、手ひきがん(街)湯を、たわらのうへよりかけ、むしろこもなどおほひ、芽を出し、二月中のせつに至つて苗代にまくなり。

大原女

日本人物

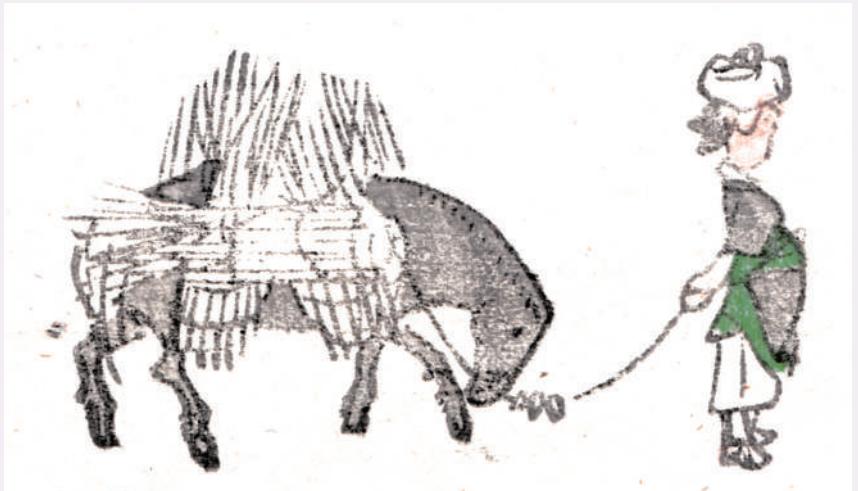
「平清盛の娘」で、「高倉天皇の皇后」になられた「徳子（院号は建礼門院）」は、源平の合戦、壇ノ浦の戦いで入水されたのですが助けられ、帰京されてからは、「大原の寂光院」に隠棲されました。この時、共に従った阿波の内侍ら数人の女官は、生計の足しにと裏山で柴を集め、薪として京の街に売りに行かれました。そして、その時の、何かしら品のある装束を、里人がまねたのが、大原女の姿の元になつたと、されております。

伊万里
江戸後期
志田焼
一尺一寸皿



河村文鳳画 「文鳳龜画」
(寛政十二年・一八〇〇年)

牧墨僊画
「写真学筆」
(文化十二年・一八一五年序)



黒木は、かまどの焚付けなどに使われ、炊飯器が出来る昭和三十年代までは、「黒木いりまへんかあ」と、柔らかな声が、京の街に聞こえてきたものでした。

頭から手拭てぬぐいをたらして道を行く、大原女の姿は清らかで、その仕草は、たおやかさに包まれおりました。また、格式かくぎを重んじ、決して押し売りはせず、そのなにかしらの品の良さが、都の大原女として人々に好まれ、江戸時代より描かれて参りました。

さて、このお皿とそつくりな絵が、「写真学筆」(文化十二年・一八一五年序)に載つており、絵師は、北斎門下の名古屋の尾張藩士、牧墨せん僊でございました。